

〈研究ノート〉

戦前の在日朝鮮人社会の文化様相に関する研究

金 仁 徳

一 序論

日本の中の在日朝鮮人⁽¹⁾の姿をどのように説明することができるだろうか。キムチ、焼肉、野球選手、パチンコ、これらの表現は今日の在日朝鮮人を生活・文化的に規定する要素である。⁽²⁾

一九二〇年代の日本の教育・文化状況を見ると、大正期には中等教育の普及が図られ、大学や専門学校の数も増え、女性を対象にする中・高等学校教育も充実してきていた。また、小学校では個性を重要視し、自主性を重視する自由教育の運動が始まった。ヨーロッパ風の童謡や童話が広まるのも、この時代であった。学問と文芸にも新しい傾向が生まれ、東洋と西洋の哲学を統一しようとする試みと、民間伝承を集めて民俗学の進路を開拓しようとする研究者も登場した。特に、社会主義思想が影響力を發揮し、プロレタリア文学

が労働者の生活を積極的に描いている。この時期は新聞と雑誌の発行が明らかに文化の大衆化に大きな役割を果たし、また、映画と演劇が大衆文化の中心的な位置を占めていた。一九二五年、日本で始まったラジオ放送は瞬く間に普及し、新聞と共に情報源になった。そして様々なスポーツも広範囲に普及した。

これと共に都市には西洋風の生活様式が取り入れられた。住宅の一部には西洋式が流行し、ライスカレー、トンカツ、コロッケ等の洋食が人気になった。洋服は男性の間でまず普及して、小学校でも男の子に洋服を着せることが多くなった。バスガールや電話交換手をはじめとして新しい職場に女性が進出し、女学生の制服にも洋装が採用された。このような日本の近代的な大衆文化は朝鮮の近代文化にも小さくない影響を与えた。特に日本の中の在日朝鮮人の文化に影響を及ぼしたことは否定できない。

在日朝鮮人の文化は朝鮮文化が変化したものであった。このような変化は文化受容を通して行われ、その速度は政策的な統制下でも、それほど速くはなかったようである。³⁾しかし、時間が経つにつれて変化の様相は多様になり、生活の中でより鮮明になっていった。特に都市周辺に居住している朝鮮人は現在、独特な朝鮮社会を形成しており、独自性を維持しているのは事実である。実際に戦前の在日朝鮮人の文化は日本と朝鮮の間に存在した、また別の空間であった。

植民地民として渡日した在日朝鮮人の歴史は、他の民族の渡日と定着の歴史と区別される。そして生存の方式も異なっていた。彼らは生存と闘争の歴史を被差別の中で創出した。したがって彼らの文化は支配者の歴史の中で多く語られることはない。

本稿では、在日朝鮮人の歴史研究において今まであまり注目されてこなかった在日朝鮮人の文化について考察するが、関連資料の限界により、朝鮮村を中心とした在日朝鮮人の文化を中心に叙述する。特に、資料的限界と人口構成の地域的偏在と政治・文化的集中度のため、大阪と東京を中心に考察する。勿論、この二つの地域は在日朝鮮人社会において現在も多数が居住する空間として地域自体が、在日朝鮮人の歴史においては象徴性があると考える。⁴⁾また、芸術界の文化活動の中で特に筆者は美術、音楽、スポーツ界等に注目した。一方、戦前の日本政府の資料は、主に支配と同化政策の対象として在日朝鮮人を把握している。したがって、残存している日本当局

の資料は政治的、社会的状態に注目している内容がほとんどである。本稿はこのような資料的限界を克服するため、基本的に日本当局の資料と最近の重要な社会的、文化関連先行研究を参照しながら、⁵⁾当時の朝鮮人が書いた一次資料(回顧、活動家たちの伝記、当時発行された新聞・雑誌等)を基礎にして作成された。

二 生活・文化的空間としての朝鮮村

1 日本帝国主義の統制政策と渡日

戦前に朝鮮人が日本に行くことは、新しい生の出発であった。それを日帝は徹底して統制し、積極的に活用した。朝鮮総督府の渡日政策は集団的な労働者管理を目標とし、段階的に施行された。

植民地朝鮮において渡日管理を担当した部署は朝鮮総督府警務総監部保安課であった。警務総監部は強制的に併合される直前の一九一〇年六月に作られ、保安課は外国旅券関連業務を担当した。しかし、旅券関連業務が渡日管理ではなかった。保安課が労働者の渡日を本格的、直接的に管理したのは一九一三年からであった。⁶⁾

特に一九二八年七月、朝鮮総督府は渡日許可条件を厳しくし、持参金を六〇円以上所持し、労働ブローカーの募集によらない朝鮮人の渡日だけを許した。一九二七年三月、日本経済は金融恐慌で大きな打撃を受け、一九二九年世界恐慌によってより深刻になると、日本企業の朝鮮人労働者の団体募集は制限された。

一方、一九三〇年代、日帝の渡日政策は朝鮮人の渡日と日本での生活に決定的な影響を及ぼした。一九三〇年代の渡日政策は一時帰鮮証明書制度と渡航紹介状発給制度で語ることができる。⁽⁷⁾

また、朝鮮人は一九三九年九月から一九四二年二月まで、いわゆる「募集」という方式で強制連行された。⁽⁸⁾一九四二年三月から一九四四年八月までは「朝鮮人内地移入斡旋要綱」により、朝鮮総督府の外郭団体である朝鮮労務協会が労働者の斡旋、募集事業の主体になり、いわゆる「官斡旋」を政策的に採択した。そして一九四四年九月から一九四五年八月、敗戦に至る時期には「国民徴用令」が適用され、公然と無差別的に強制連行が行われた。

渡日した朝鮮人は一九二〇、三〇年代に最も多かった。したがってその時期に日本に居住する朝鮮人の人口が急増した。この時、渡日者が急増したのは、朝鮮経済の困難と生活に対する要求が作用したからである。一九三〇年代中期からは在日朝鮮人の場合は、鉱工業部門の従事者が増加し、不安定で臨時的な各種雑業、肉体労働、零細工場に従事する人が増えた。したがって日雇い労働者が全体の職業分布の中で最も多い部分を占めるようになった。日本当局はこれらの朝鮮人の問題点として、一つの場所に長く定着できず、賃金のより高いところが見つければ、いつでも移って行くという事実を指摘している。そして仕事において、熟練度が劣り、使用主が信用できなくなるという。⁽⁹⁾

渡日した朝鮮人たちは全員日本に残留せずと生活していたのではなく、故郷に戻って行った人々も少なくなかった。一九二〇年代末に日本から帰還した朝鮮人に対する調査内容を参考にすると、全体帰還者のうち、再び渡日する予定である一時的な帰還者が五二%であった。再び渡日する意思が全くない永久帰還者たちは四八%程度であった。すなわち、再び渡日する意思がない人々が全体の半分近くであったのである。彼ら、永久帰還者たちの帰郷理由は極貧の生活、労働中に被った災害によって疾病にかかったとか、求職の失敗、または長期的な失業で生活が極度に困難だったためである。当時、朝鮮の農村では数多くの朝鮮人たちが生活の苦境を解決しようと日本に求職移動したが、その多くの人々は日本での生活に適応できずに再び故郷に戻って来た。⁽¹⁰⁾

2 朝鮮村の形成と発展

戦前、在日朝鮮人の定住の空間を日本では朝鮮人部落、朝鮮人集住地、朝鮮人村、朝鮮人町、朝鮮人多住地区等と呼んだ。⁽¹¹⁾このような朝鮮村の形成は、日本の近代化過程において醸成された日本人の朝鮮人に対する民族的差別意識に加え、朝鮮村に対する地域差別を生んだ。当時の日本政府は汚い場所、社会悪を生む温床であると考えていた。⁽¹²⁾

渡日した朝鮮人は日本全域に居住した。彼らの居住状況は、日本

の産業構造及び労働条件と関連を持っており、移住初期である一九一〇年代には北海道・福岡・大阪・兵庫等での朝鮮人増加率が高い。これらの地域の中で絶えず一〇%以上の増加率を見せる場所は大阪と福岡であった。日本資本主義が発展することにより、広い労働市場と比較的よい労働条件によって朝鮮人労働者は大阪に密集するようになった。⁽¹³⁾ また、最初に生活基盤を築いた朝鮮人労働者を頼って大阪に向かう朝鮮人たちの渡日が増えることによって、大阪に居住する朝鮮人はより一層増加した。

これに比べ、福岡は一九一〇年代、日本最大の鉱山地帯である九州で最も朝鮮人が密集した地域であり大規模な炭鉱が存在した。福岡は労働条件が劣悪で、つねに労働者の移動が絶えない場所であった。しかし、この地域の朝鮮人増加率は低くはならなかった。その理由は福岡の地理的な条件と関係する。福岡は関釜連絡船の終着地と近い場所に位置し、渡日朝鮮人にとって「入り口」であった。また、日本の労働市場に対しての情報や縁故が全くなかった朝鮮人が炭鉱労働者として第一歩を踏み出した場所でもあった。移住者が急速に増えた一九二〇年前後、朝鮮村が形成され始めたが、まず初めに村が形成された場所は渡日者が最初に足を下ろした下関と門司であった。

移住した朝鮮人の定住空間である朝鮮村は日本人の目から見れば、それこそ汚い場所であった。しかし、事故や疾病で困難な状況に置

かれると、治療も受けることができ、旅費を用意できる空間、解放の空間でもあった。⁽¹⁴⁾ このように朝鮮村は単純に住居問題だけを解決するのには意味があったのではなかった。これと共に民族の進路を想って苦悶し、共に夢を見、団体を作り、積極的に活動を展開する政治的中心でもあった。

大抵、朝鮮村は飯場、会社の社宅、低地帯、湿地帯、河川敷等に造成された。これら朝鮮村の朝鮮人達は生活の中で日本文化と出会った。酒を飲み、服を着、⁽¹⁵⁾ 寝ること等あらゆる部分で日本と衝突した。朝鮮村では解放感を満喫した。マッコリを飲み、朝鮮服を着て、オンドルを作って使用した。勿論日本酒を飲んだり、うどんを食べたり、着物を着たりもした。こたつを使用し、日本語を使って、朝鮮語も使った。自由に日本文化が受容された場所もまた「朝鮮村」であった。

この中でマッコリは象徴的な意味がある。日本人世界から離れている朝鮮村にはマッコリがあった。家の片隅で簡単に造ることができた。在日朝鮮人が多くなるにつれて、朝鮮人が住む部落が形成され、そこで販売されたのがこの濁酒であった。発覚しなければ酒税が付加されなかったため、比較的安く造られた。濁酒密造と関連して各部落で検束される人々が続出したのは協和会が大部分の在日朝鮮人を組織していた一九三九年頃であった。

また日本当局が指摘していたように、朝鮮人は賭博を娯楽として

楽しんでいた。朝鮮村には投銭や、すごろく、骨牌で時間を過ごす人が多かったが、朝鮮村を渡り歩きながら賭博をする人もいた。⁽¹⁶⁾

巫堂の厄払いがあり、朝鮮の名節の時には村の広場で朝鮮式の公演を観ることができた。そして朝鮮式の習慣がそのままに、突然けんかが起こったり、泣き叫ぶ女性の声、賑やかな笑い声、大声で叫ぶ男性の声が鳴り響く、日本社会とは異質の空間であった。⁽¹⁷⁾ ある在日朝鮮人の回顧は、当時の生活をよく表現している。

夜は別世界だった。密造したマッコリがあり、ニンニクと唐辛子を入れたキムチがあり、酒に酔えば、故郷の民謡が流れ出てきた。

日本の虐政を恨み嘆く青春歌が出てくれば、アリラン、トラジ、ノドウルカンピョン、ソサンバルギョン、春香歌等、知っている歌全部が流れ出てきて、夕方六時から始まった酒の席が明け方二、三時まで続くことも多かった。⁽¹⁸⁾

一九二〇年代には、村の中に朝鮮飲食店や材料の店が多くでき、朝鮮語だけで十分に生活が可能になった。⁽¹⁹⁾ 一九三〇年代には工場の職工や、店員として働いて資金を集めて工場を構えたり、商売を始めた⁽²⁰⁾りもした。

朝鮮村は児童たちが朝鮮語や朝鮮の歴史を学ぶことのできる教育の場でもあった。朝鮮村を渡り歩く商人を通して手に入れた朝鮮語の小説や古典小説を貸し借りしながら読むことは単純な娯楽に終わらず、故国の歌手の公演や朝鮮語の演劇公演も彼らにとってよい教

育の手段になった。また大阪、神戸、東京地域の朝鮮村では自主的な教育機関を運営する場合もあった。労働組合を通じてや、協和会、あるいは純粋な民族的な性格を持った夜学が入ってきて朝鮮語を教えたりもした。勿論、日本の学校に児童を就学させる場合もあったが、経済難と日本政府の教育政策についての不満で、朝鮮村付近には夜学や塾が設立された。⁽²¹⁾

朝鮮村の在日朝鮮人は普通朝鮮語を使用した⁽²²⁾が、日本語を使用する場合もあった。特に、子供たちはより日本語を多く使用した。朝鮮人の間では子供たちに対する朝鮮語教育の必要性が語られ、具体的な対策として新聞社による日本での巡回講座なども提案された。⁽²²⁾

『民衆時報』一九三六年一月一日付の「年頭所感」で金善姫は朝鮮語教育の必要性を主張している。朝鮮から来る手紙を読めない現実を嘆き、家でも朝鮮語教育をしたり、夜学を作って朝鮮語教育に力を入れるべきだと主張した。朝鮮民族が存在する限り、朝鮮語がなくなることはない。特に、大阪に住んでいた金水秋は児童教育の深刻性を提起し、一九三三年の調査において大阪の朝鮮人一四万人中、学齢児童が一万四〇五二人であることを指摘し、児童の未就学問題を重要なものとして取り上げた。そして大阪の朝鮮人児童の未就学率が六三％以上である理由を挙げているが、一番目は保護者の未定着、二番目は生計維持のための労働、三番目は言語不通と年齢過多等を指摘している。⁽²³⁾ 一九三六年、大阪では大学を卒業しても朝鮮語

で感想文を書ける人がほとんどいなかった。⁽²⁴⁾

日本で生活していくための日本語教育にも問題があったが、朝鮮語教育は深刻な水準だった。しかし、在日朝鮮人キリスト教信者の場合は、聖書講読のために朝鮮語を読めない児童がほとんどいなかった。⁽²⁵⁾ 反面、教育を通じた日本人化は速い速度で推進されたともいえる。朝鮮内において日本語を理解できない人の比率は、一九三〇年代中期まで九〇%だったが、一九三九年を境に八六・一%になり、在日朝鮮人の場合は三〇%にしかならなかったという。⁽²⁶⁾ 当時、朝鮮人の大多数は日本人より教育水準が低かった。⁽²⁷⁾

3 大阪・東京の朝鮮村

(1) 大阪

戦前の大阪市は朝鮮人が二番目に多く居住する場所であった。⁽²⁸⁾ ここでは東成区、生野区などの地に朝鮮人集落地が形成されたが、渡日朝鮮人が増加するにしたがって、朝鮮村の規模も大きくなり、役割も拡大された。

一九二〇年代後半、大阪市の朝鮮人密集地域を見ると、大阪市一三区の中で外郭地域である東成区と西成区に最も多く居住していた。大阪の場合、成立時期が分かっている主要な朝鮮村の形成状況を整理してみると、次のようである。⁽²⁹⁾ 東成区の場合、東小橋町の朝鮮村（一九三八年現在五五戸、五八五名居住、古い長屋を借りて形成）、猪飼

野町の朝鮮村（一九二八年現在一六二戸、一五七七名居住、古い長屋を借りて形成）、生野区の場合、国分町の朝鮮村（一九二四年成立、一九二八年現在一五戸、一一七名居住、養鶏場を改造して生活）があった。そして西成区の場合、鷺州町の朝鮮村（一九二三年九月成立、一九二四年現在一三戸、四四人居住、市場として建設された地域に不景気で空き家が増え朝鮮村を形成）、泉北区は北掃村春木に朝鮮村（一九二二年春に成立、一九二四年現在一九戸、七六名居住、岸和田紡績が朝鮮人職工用として建築した所）、港区は船場に朝鮮村（一九二三年成立、一九二八年現在四五戸三四七名居住、空き地に仮設小屋を建てた）、小林町に朝鮮村（一九二三年成立、一九二八年現在四五戸三三三名居住、一九三三年現在一〇〇〇名余り居住、空き地に仮設建物を建てた）が形成された。

一九二八年を基準にして日本当局が調査した東成区に居住する朝鮮人の生活状態を見ると、⁽³⁰⁾ 東小橋町に所在する朝鮮村（以下、朝鮮町）と猪飼野町に所在する朝鮮村（以下、猪飼野）にはそれぞれ四七五名と一七九名が居住していた。この中で朝鮮町居住の朝鮮人の二九・五%である一四〇名と、猪飼野居住朝鮮人の三三%である五九名が配偶者と共に生活していた。時間が経つにつれて家族移住が増えたが、大阪地域の朝鮮人人口のうち、男女比は女性を一とする⁽³¹⁾と、一九二〇年五・二、一九二五年四・三、一九三〇年二・二であった。そして年齢も高齢化し、職業を持った者の比率が低くなつて

いった。⁽³¹⁾ 一方、独身移住の場合、以前の独身移住と異なり、故郷に送金する者の比率が下がる流民化現象が現れた。⁽³²⁾

代表的な大阪の朝鮮人密集地域は東成区東小橋町の朝鮮村であった。日本当局はここを朝鮮村としたが、朝鮮村形成の歴史を一九〇七年から始まったと推定していた。⁽³³⁾ 一九〇七年、東小橋町一五七番地に朝鮮村が形成されたのであるが、これはメリヤス工場の付近からだんだんと発展したのである。これと共に、猪飼野町の朝鮮村も一九二〇年代に新しく形成された朝鮮人密集地域であった。この地域に朝鮮人が集住するようになったのは平野川改修工事に朝鮮人が参加したことから始まった。⁽³⁴⁾ この工事は鶴橋耕地整理組合によって一九一九年三月に始まり、一九二三年に完成し、全長二一四メートル、幅一六メートルであった。

ところが、猪飼野という地名は一九七三年、大阪市の地名変更によって使用されなくなった。⁽³⁵⁾ 一九九一年三月現在、生野区の居住者一五万九三二七名のうち、韓国・朝鮮人は三万八四〇四名で二四・一%を占めている。ここに無国籍者と日本国籍者を含めると、はるかにその数が多くなると考えられる。⁽³⁶⁾ その原形は戦前に形成されたのであるが、現在もその規模を維持しているのである。一九三〇年代を含め一三年間、四〇%以上が朝鮮人であった。⁽³⁷⁾

戦前に猪飼野一丁目に住んでいた金成鶴は当時を回顧して、劣悪な生活状態を語っている。それによると、日本人は一円一〇銭の日

給をもらえるのに朝鮮人は一日に八五銭しかもらうことができず、それからまた食事代として五〇銭を引かれたと言う。米ぬかに冷たい水を入れて塩を振っただけの食事、寝る場所には南京虫がうようよとしており、ガラス工場では二交代で一日一二時間働いたという。⁽³⁸⁾

このような大阪での朝鮮村の人口密集状況は出身地域と関連が深い。一九二〇年代後半、大阪居住の朝鮮人を出身地域に分類すると、全羅南道・慶尚南道・全羅北道・慶尚北道等の順であった。⁽⁴⁰⁾ この当時行政区域上済州は全羅南道に属していたので、全南出身朝鮮人には済州島出身者が含まれていた。今までに明らかになっているように、朝鮮人の出身地域分布で注目されるのは済州島出身の朝鮮人である。彼らは大正後期から昭和初期に地縁と血縁を頼って多数が渡日した。一方、一九二〇年代後半に港区には小林町・船町・南恩加島町に朝鮮村があった。この地域に居住する朝鮮人は嶺南出身で、彼らは土木建築労働に従事する自由労働者であった。この地域では学齢児童が四〇〇名を超えたが、生活が困難で数十名程度しか日本入学校に通っていないかった。⁽⁴¹⁾

以上で見えてきたように猪飼野の朝鮮人は特別な生活文化を維持して暮らしていた。当時の猪飼野では朝鮮語を日常的に耳にすることができた。子供たちの場合、大部分は日本語を話しながら遊び、彼らは二年ぐらいで、朝鮮語を忘れてしまうのが現実であった。⁽⁴²⁾ 当時、子供たちが日本語を一生懸命学ぶのは学校で優秀な成績を収めるた

めであったという。勿論、日本語を話せなければ、入学が許可されない場合もあった。猪飼野の朝鮮人学生たちは学校の代表として陸上・柔道・野球選手として活躍し、また相撲競技に代表として参加して優秀な成績を収めた。⁽⁴³⁾

そこでは生活の中に迷信が根深く残っていて、占い師や巫堂の行き来が盛んで、無免許歯科医が巡回しながら診療をしたという。⁽⁴⁴⁾一九三九年になると、そこには二〇〇余りの生活必需品の店ができて、明太、唐辛子をはじめとして婚礼品まで販売していた。⁽⁴⁵⁾猪飼野の朝鮮村は朝鮮文化そのものだったのである。

猪飼野にはコムシン、明太、豚肉、豚の内臓、豚の頭等売り、雑貨店、魚屋、精肉店などの各種の店があった。露天商をしていて後に店を構えて商売をする場合が多かった。ここは公設市場ではなく、一九二〇年代初めに市場ができた時、警察は道を汚し、交通を妨害するとして市場の形成に反対した。これと同様の市場が今宮、森町、中道などの地にあった。⁽⁴⁶⁾

ここには、幼い頃から食べ慣れている料理があり、幼い頃から着ている服があり、それらを買うことができる場所は朝鮮市場以外にはなかった。⁽⁴⁷⁾

一方、一九三〇年代半ばの小林町にも朝鮮村があった。当時、ここに集住した朝鮮人は一〇〇〇人余りであった。出身地は前述したように嶺南出身者が主で、馬車荷役業・製材所の働き手・土木労働

者が多数であった。この地域は木材集散地として製材所が多かったため、これに関連した職種が多かった。この地域に住む朝鮮人のうち、一部の青年たちは近くの南恩加島町と大運橋にあった製鋼所や造船所などに通ったりもした。⁽⁴⁸⁾

ここには米屋、八百屋、雑貨店、乾魚物商、朝鮮服屋などがあつた。そしてマッコリ、朝鮮式の餅、朝鮮海苔、ムツ、キムチ、豆もやしを専門に栽培して売る人がいた。特に魚・乾魚物の店ではタチウオ、エイ、イシモチ、ニシン、明太などを売った。

大阪の千日前の劇場では朝鮮の歌手、南人樹が来て見物していたといい、前述したように村の広場では朝鮮のユツチャベギ、パンソリ、古典舞踊の公演がよく開かれた。そしておじさんに昔話を聞くこともできたという。⁽⁴⁹⁾娯楽がそれほどなかった当時の朝鮮での普遍的な姿だった。子供たちは麻雀、チャチギ、石蹴り、将棋、馬乗りなどの遊びをした。このような姿は日本の子供たちの遊びとよく似ていた。⁽⁵⁰⁾

そして朝鮮村には朝鮮語の本を売る行商が回りながら、春香伝、沈清伝、洪吉童伝などを売り、千字文、玉篇、便箋なども買うことができた。特に春香伝は絶対的な人気だったという。⁽⁵¹⁾ある在日朝鮮人労働者の場合だが、仕事をして家に帰ってドストエフスキーの『罪と罰』やトルストイの『復活』等を読んだという。⁽⁵²⁾兵庫県社会課の『朝鮮人の生活状態』（昭和一二年四月）の在日朝鮮人の趣味を

調査した内容を見ると、読書の比率が最も高く、次が映画鑑賞であった。⁽⁵³⁾ 当時の大阪の朝鮮人の生活を記録した崔碩義の場合、好んで食べていた料理がえいの刺身、ホルモン、シレギ汁、カクテキ、水キムチ、ピビンパなどであった。勿論、当時の日本ではパンやカレー、コロッケが流行していた。⁽⁵⁴⁾ 大阪では一九四二〜四三年頃から八尾、西成、生野等の地で朝鮮人を対象にした小規模のキムチ商売が始まった。またキムジャンの時期を迎え、大阪消費組合東支部は白菜の共同購入を通して、良質の商品を安い価格で購入しようと積極的に活動をしていた。キムジャンは在日朝鮮人にも重要な年中行事のひとつであった。他のどんなご馳走よりもキムチ、カクテキが食卓にのぼってこそ、食が進みそこが朝鮮の情緒であり、味であった。⁽⁵⁵⁾ 朝鮮料理屋である金光園では忘年会や新年会を積極的に行なうことを奨励する広告を新聞に出したりもしている。⁽⁵⁶⁾ 実際に、民衆時報社の広告に新年大懇親会を金光園で開催するという記事があり、一九三六年一月一九日に懇親会は盛大に開かれたという。⁽⁵⁷⁾

『民衆時報』によって当時、朝鮮人がしていた商業活動の内容を確認することができる。下宿、漢方薬店、製菓業、紙商、米屋、電波商、蓄音機商、飲食店、古物商、病院、理髪店、印刷所などをしていた。⁽⁵⁹⁾ 一九三六年頃、大阪の朝鮮服を取り扱う店は一二〇軒余り、漢方薬店は三七〇軒余りであった。そして朝鮮料理店も多く存在し、二七〇〇人余りが働いていた。⁽⁶⁰⁾

製菓業者の中には、販売業を兼ねながら朝鮮の処方方を改良して日本の専門家たちの諮問を受け、一〇年間にわたって研究し、⁽⁶¹⁾ 私たち「の薬」を作りだしたと宣伝している例もある。朴彰禧和漢薬房は鍼術も用いながら診療した。⁽⁶²⁾

外村大の研究によると、一九三四年以前には朝鮮人医師がいなかったという。⁽⁶³⁾ 実際に当時日本語を解読する比率が世帯主の次元で二〇%を超えない状況から見ても、病院に出入りすることは金銭面以外にも難しいことであった。したがって、韓薬房が病院の代わりであった。問題は脚気、肺結核、性病、神経衰弱、モルヒネ中毒などに対する薬房の治療に限界があったことである。このような現実を打開するために一九三一年一月、北区吉山町に大阪朝鮮無産者治療所が設立された。

(2) 東京

東京の在日朝鮮人の推移を見ると、一九二〇年以後の一五年間で女性と東京で出生した児童の比率が増加し、配偶者がいる人数も増えた。合わせて一九三〇年以前に日本に来て五年以上暮らした在留朝鮮人男性も増加した。一九二〇年後半に渡日した人の場合定住する人が増加した。⁽⁶⁴⁾

東京の朝鮮人は「東京のチギミ」ともいった。⁽⁶⁵⁾ 日本人も見捨てて近寄らない空間がまさに朝鮮村なのであった。下町にも属さない空

間、すなわち遊郭、拘置所、食肉処理場、廃墟になった工場敷地、市場跡などに集まって朝鮮人たちは暮らしていた。多数の朝鮮人は東京府の場合には、細民居住地である三河島町、日暮里町、千住町、南千住町、寺島町などで、市内では本所区、深川区、芝区、小石川区、神田区等に集まって暮らしていた。このうち、代表的な朝鮮村は深川区の州崎遊郭付近、豊島区の東京拘置所付近、小石川区久堅町の共同印刷株式会社付近、芝区西芝浦の食肉処理場付近、城東区大島町等の地であった。⁽⁶⁶⁾ここに住む朝鮮人は明らかに日本社会の最下層民として存在していた。

一方、他のどの地域よりも東京は留學生の数が多かった。彼らは主に労働をしながら学業を行っていたため、在学期間がだんだん延びて、所期の目的を貫徹する者は少数に過ぎなかった。⁽⁶⁷⁾留學とはいももの、生活すること自体が大変な場合も少なくなかった。留學生は学校を抛り所にその周囲で寄宿して生活した。東京帝国大学と早稲田大学付近と神田地域は多数の留學生が居住する地であった。神田区、牛込区、本郷区と旧豊多摩郡戸塚・中野等の地はそんな地域であった。彼らは主に下宿と寄宿舎に居住した。⁽⁶⁸⁾彼らの多数は部屋に帰って寝るだけで食事は学校の食堂を利用した。⁽⁶⁹⁾

一九三七年六月、『改造』に「朝鮮人村落を行く」というルポを書いた張赫宙は東京の芝浦月見町と深川地域の千駄町、天昭園バラック、小石川等の地の朝鮮村を訪れている。ここで彼は写實的に在

日朝鮮人の生活を描いている。板子とトタンでできた家が密集するこの場所は、日本社会の普遍的な町の姿と異なり、朝鮮的であった。女性たちの服装は朝鮮内の姿とほとんど変わらないが、よくみると、履物は下駄を履き、スカートは日本の生地であった。部屋の内部に入ってみると朝鮮の生地のできた布団や座布団があり、食堂ではマツコリを密造して売っていた。⁽⁷⁰⁾

このような風景は張赫宙の郷里、大邱とまったく同じで、まるで大邱にいるような錯覚に陥ったという。張赫宙は朝鮮人村に入った時、朝鮮にいるように感じたという。⁽⁷¹⁾一方、そこで使用されていた言葉は、天昭園バラックでは完全に東京労働者語であった。特に小石川地域の居住地は「太陽のない道」というトンネル型の長屋に約四〇〇人が住んでいた。⁽⁷²⁾

張赫宙が描いた朝鮮村の姿は朝鮮人村が形成された地域での普遍的な姿で、そこに住む人々は朝鮮の文化と伝統を保持しながら生活していた。大部分の地域では朝鮮語だけを使用し、キムチ、コチュジャンもあった。そして河川敷に多数が居住していたため、流れている水でよく洗濯をし、サンチュ、白菜を栽培して食べていた。そして行商を通して服、コムシン等の各種朝鮮の品物を購入して使用し、祭祀や料理、畑仕事を学んだという。ここでは根強く儒教意識が残っていて、長男だけが学校に通う場合も多かった。⁽⁷³⁾

在日朝鮮人は築地や浅草の劇場街に行ったりもしていた。韓国で

は大衆小説家として知られている金来成⁽⁷⁴⁾は当時の浅草を次のように描いている。

この浅草という発音を耳に入れるたびに、私の心臓はまるでゴム風船のように膨らみ、泣くことを悟る。浅草の不思議な匂いが私の飢えた鼻を無限に刺激するのである。銀座や新宿や新橋や神楽坂などがとうてい持ち得ない浅草独特の匂いとは一言でこれを表現するならば、「楊貴妃の死臭」とでもいえるだろうか。⁽⁷⁵⁾

一部の在日朝鮮人は朝鮮料理店に行つて、朝鮮から受け取つたお金や稼いだお金を遊興費として使い、いわゆる花柳病にかかつて健康を損なう場合もあつた。⁽⁷⁶⁾

そうかと思えば、『在東京朝鮮人協和会会報』は、一九三五年当時の朝鮮人の生活の悲惨さを表現している。⁽⁷⁷⁾ 具体的にその内容を見ると、自由労働者である「私たち」が農村で暮らすことができず、故郷と親戚を捨てて都市に來たことは、最後の手段であつたが、都市もやはり排斥をしているため、闘いながら暮らすしかないというのである。家賃を払えず、道に追い出され、道には悲しみの積もつた人々があふれていることが現実にあつたという。

在日朝鮮人にとって、冬は敵のようだったという。子供たちは遊

ぶこともできず、工場で働き、地下足袋で昼夜の寒さに耐えねばならなかつたというのである。厳冬雪寒が來ても、寒さと闘うことができないと痛嘆している。⁽⁷⁸⁾

三 芸術分野における在日朝鮮人の文化活動

在日朝鮮人の文化活動は朝鮮村を中心として形成された。その中には労働者や留學生の社会が存在した。したがつて労働者や留學生、特に留學生が文化活動を主導した。

1 美術・音楽界における活動

在日朝鮮人の文化活動の中では、美術分野がまず注目されるだろう。初期の在日朝鮮人社会を留學生が主導したように、美術分野も留學生が主導し、朝鮮人が定住する時期にもその傾向に変わりはなかつた。そして日本に留学していた美術学徒は戦前に大部分帰国した。このような美術学徒すなわち、朝鮮の西洋画家の最初の世代たちが主に学んだ場所は日本の東京美術学校であつた。⁽⁷⁹⁾ 重要人物たちを見てみると、高義東は一九一五年、東京美術学校西洋画科を卒業して朝鮮最初の西洋画家になつた。また、この学校には金觀鎬、金瓚永、金復鎮等が学んでいた。これと共に孔鎮衡、李濟昶、都相鳳等が西洋画科に、李漢福が日本画科に、任濤宰が図案科に入学していた。

金観鎬は一九一六年に川岸で頭を洗っている裸の女性二人を描いた「夕暮」という作品で日本の官展である文展で特選となった。一方、金復鎮は形成芸術理論に基づいて部門運動としての芸術、美術運動を全体の民族運動の中で思考した。彼は他の作家たちと異なり、朝鮮の独立と解放に多くの関心を持っていた。金復鎮はカップ（KAPF 朝鮮プロレタリア芸術家同盟）の創立を主導する。そして機関誌『芸術運動』の表紙を飾り、「主題強調の現代美術」という文章を発表した。そして序列一位で中央委員になり、綱領と規約を基盤に精力的に活動していた。そうしながら、外郭組織である創光会に関与して、カップ内の独自の美術家グループを形成して美術界での勢力強化も図った。当時、プロレタリア美術家たちは宣伝活動と有機的に結合されていて労働・農民運動に関与した。それは当時配られたポスター、チラシ等を彼らが主に制作していた事実からも確認することができる。

この頃、一九三〇年、日本はプロレタリア美術運動が最高潮に到達した。当時、東京美術学校卒業生のうち、約三分の一程度がプロレタリア美術の影響を受けていた。⁽⁸⁰⁾ 当時、ナップ（NAPF 全日本無産者芸術連盟）が開催したプロレタリア美術展覧会にも留学生たちが出品していたが、鄭河普がそのうちの一人であった。鄭河普は一九三〇年一月からナップに所属していた唯一の外国人であり、幼い頃から日本で新聞配達をしていた。彼は一九三〇年、水原で開か

れた第一回プロレタリア美術展を主導するが、ここには鄭河普のハ朝鮮共産党の公判日や、矢部友衛のハ職場から帰る道⁽⁸¹⁾が含まれていた。

美術分野において留学生が日本と交流していたことはよく知られているが、日本に渡って行った朝鮮人留学生たちがプロレタリア団体に所属して活発に活動していたのがコップ（KOPF 日本プロレタリア文化連盟）においてであった。⁽⁸²⁾ これはコップが存在しながらも、カップ東京支部がコップの組織内に発展的に解消していったためであった。ここで注目される人物が朴石丁、尹相烈等である。

朴石丁は一九二九年一〇月に日本に渡り、一九三一年からはプロレタリア美術家同盟城南地区に所属していた。一九三二年にはプロレタリア美術家同盟植民地委員会委員長の責務を担った。⁽⁸³⁾ 彼はコップに加盟すると同時にカップにも所属していて、朝鮮と日本を連結させる人物であった。朴石丁は『プロレタリア美術』（二号）（一九三二年）の「緊急同意朝鮮委員会強化のために」、「プロレタリア美術」（三号）の「弾圧下の朝鮮プロ美術」、挿絵「韓日労働者、団結しよう」等の文章を書いた。また彼は尹相烈とコップ朝鮮協議会が発行した『私たち仲間』と『赤い拳』の発行にも関与した。『赤い拳』は主に在日朝鮮人の啓蒙を目的に発行された出版物であった。一九三〇年代には韓国美術史の重要な位置を占める人々が日本に留学した。⁽⁸⁴⁾ このうち李仲燮は注目される人物である。彼は神田に下宿

しながら東京美術学校に入学して勉強した。李仲燮は一九四〇年、自由美協展に〈牛〉を出品して協会長賞を受賞したりもした。⁽⁸⁸⁾

美術分野と同様、音楽活動も在日留学生によって積極的に展開されていた。在日留学生の音楽分野での活動をみる時、まず挙げるべき人物は洪蘭坡である。彼は一九一八年日本に渡り、東京音楽学校に入学して正規の音楽教育を受けた。ここで彼は朝鮮最初の芸術雑誌である『三光』を創刊した。音楽、美術、文学を主題にした雑誌として在日本東京朝鮮留学生楽友会の機関誌であった。

2 スポーツ界においての活動

在日朝鮮人の初期の各種スポーツ活動は主に留学生団体によって主導されていたと言っても過言ではない。留学生たちはスポーツ活動を健康の増進という本然の意味から積極的に推進する一方で政治的にも活用していた。留学生組織のうち、代表的な団体である学友会⁽⁸⁸⁾の場合、定期的に運動会を開催していた。最初の運動会は一九一五年五月七日青山練兵場で五〇〇名が参加して盛大に開かれた。⁽⁸⁹⁾一九一八年四月三日にも運動会が大規模に開かれた。この日の行事は戸山陸軍練兵場で開かれた。四〇〇〇五〇〇名が参加した運動会は運動競技と共に仮装行列が行われた。仮装行列では朝鮮の地図が描かれ、朝鮮語で檀君の所有物であることが明示され、参加者は李舜臣・論介・鄭圃隱・乙支文徳等に仮装して行進した。

以後も学友会の運動会は主に春に開かれ、各種の運動競技が行われた。一人一脚、二人三脚、一〇〇メートル走、提灯競走、障害物競走、騎馬競走、女学生走、リレー、各大学同窓会別競走等が行われた。そして一九二一年の競技では紅・白・青・黄等に分かれて運動会が行われた。⁽⁹⁰⁾

一九二三年四月二日の運動会は、駒場の東京帝国大学の運動場で朝鮮人労働者と連合して挙行された。一五〇〇名が集まったこの日の運動会は独立運動のために開かれた大会であった。実際に各種檄文が配られ、ゴム風船に朝鮮独立万歳という標語を書いて飛ばしたりもした。⁽⁹¹⁾以後も学友会が主催した運動会は毎年定期的に開かれた。⁽⁹²⁾

また、一九三五年七月七日、生野小学校の運動場では関西大学朝鮮人留学生会主催で第一回関西蹴球大会が開かれ東成区が優勝をした。⁽⁹³⁾同じ年の一月一五日、沈滞している社会の雰囲気改善するために在京都朝鮮人留学生学友会による歌劇大会が開かれた。⁽⁹⁴⁾一月一五日には阪神消費組合青木出張所が主催して夜学運動会が開かれ、八歳から一八歳までの八〇名の学生が集まって一日を過ごし、この場では貧しい労働者のための基金が集められたりもした。⁽⁹⁵⁾

今宮共励青年会では朝鮮日報大阪支局とYMCA大阪連台会の後援で、一九三六年一月一日午前八時から住江公園で庭球と蹴球大会を開催した。⁽⁹⁶⁾結果は庭球では中央教会、蹴球では北区教会が優勝

した。⁽⁹⁷⁾

在京都朝鮮人留学生学友会は一九三六年六月一七日に同志社大学のテニスコートで親睦庭球大会を開いたが、リーグ戦では聖峰中学チームが、個人戦では李耿年・金性煥組が優勝したという。⁽⁹⁸⁾

学友会は自主的に開催した運動会以外にも日本国内の競技大会に参加した。主に体育部に蹴球部、陸上競技部、庭球部等の競技団体を組織して参加した。加えて朝鮮への遠征試合を通じてスポーツの質的向上と健康増進等を図った。⁽⁹⁹⁾

一方、在日朝鮮人たちは生活の困難さを訴えながらも、工場主たちは書籍や娯楽、スポーツを通して労働者の不平を払拭しようと言っているが、労働者にとって名誉や娯楽に何の意味があるのかと反発している。⁽¹⁰⁰⁾ 当時の日本文化の象徴であるトンネル、アスファルトの道、巨大な鉄筋コンクリートの建物、港口の岸壁等は朝鮮人の肉体労働者の血と汗の結晶であった。それにも拘らず、日本人労働者と朝鮮人労働者を平等に扱う企業主は全く存在しなかった。劣悪な無制限の労働条件で貪欲な工場主に搾取された。結局は民族的偏見と他の様々な偏見で二重三重の苦痛を味わったのである。⁽¹⁰¹⁾

また、各種の組織誌は運動競技大会の記事を消息欄に載せている。例を挙げると、『荒川親睦会ニュース』は三友倶楽部で蹴球大会を開催して荒川東光蹴球団が参加したという。⁽¹⁰²⁾

また、日本には相撲からレスリングに転向して伝説的な人物にな

った力道山がいる。力道山の本名は金信洛で、一九四〇年に一三歳で渡日した。⁽¹⁰³⁾ 以後、日本の相撲界で活躍し関脇になった。彼は二六歳の時に朝鮮人としての限界を感じて相撲をやめた。以後、一九五一年プロレスラーに転向して全世界チャンピオンであるボビー・ブランドとデビュー戦を行い、以後強敵たちを次々に倒しながら北米大陸を席卷した。力道山は、日本の光り輝く星”になったのである。

また日本の戦前のプロ野球には朝鮮人選手として朴賢明がいた。彼は一九三八年阪神タイガースに入団して投手として活動した。また明治大学を卒業して巨人球団で活動した李八龍（藤本英雄）という選手もいた。⁽¹⁰⁴⁾ そして日本卓球界には刮目すべき成果を挙げた人物として崔根垣がいた。⁽¹⁰⁵⁾ 一九三九年四月関西学院大学に入学して、全日本学生卓球選手権大会に出場して何回か優勝し、⁽¹⁰⁶⁾ 関学の黄金時代”を作り出した人として有名だった。

四 結論

今日の在日朝鮮人の文化は明らかに移住の歴史から出発した。朝鮮人の移住は徹底して日本資本主義経済によって要請された。そして朝鮮人は日本社会の最下層民として編入され、帝国主義日本の民衆として生活した。したがって在日朝鮮人の生は都市的民衆の生活であった。結局、在日朝鮮人の文化もこのような規定的要素によって左右され、その要素が内在されていた。

このような在日朝鮮人の文化は政治的・同化的・芸術的内容を同時に持っていた。これらの要因は混ざり合っていた。

在日朝鮮人が形成した朝鮮村は朝鮮人の「解放区」であった。日本語もよく分からないまま、昼間の労働にくたびれた朝鮮人が夜になり戻って来た時、何の気兼ねもなく休むことができる場所がまさに朝鮮村であった。朝鮮村では地縁的、血縁的な相互扶助がよく行われていたので、就職など、生活上の便宜を簡単に得ることもできた。

在日朝鮮人の芸術界の文化活動において筆者は美術、音楽、スポーツ界等に注目した。美術、音楽分野も留学生が主導し、日本に留学した美術、音楽学徒は戦前には大部分帰国した。そして、在日朝鮮人の各種のスポーツ活動は、初期には主に留学生団体によって主導された。留学生たちはスポーツ活動を健康の増進のために活用し、そして政治的にも活用した。代表的な留学生組織の団体である学友会は定期的に運動会を開催した。また、朝鮮からやってきた演者による各種公演は在日朝鮮人の関心を集めた。経済的な負担にも拘らず、朝鮮の文化に接して楽しむことは大きな喜びであった。特に朝鮮語の演劇は日本という地域で表出される民族意識の政治・文化的な表現であった。

在日朝鮮人の大多数は労働者階級であった。したがって彼らの文化は日本の大都市の労働者文化の普遍性と共に、日本の中の朝鮮人

文化として規定することができる。少数のインテリは多様な日本文化を体験し、同化的文化を牽引していた中核勢力であった。また、在日朝鮮人の文化・芸術活動においては留学生の役割が大きかった。留学生は渡日と共に、在日朝鮮人社会の中心部に入り、各種政治・経済・社会・民族問題等に深く関与するようになった。彼らは日本文化に優先的に接触しながら共有したりもした。

結局、在日朝鮮人の文化は民族のかつ同化的要素と共に共生的部分などを含みながら、日本の中の朝鮮文化として存在したのである。ここには民族的問題と階級の問題が同時に思考され、同時に新しい時代を目指す躍動性も持っていた。特に日本という地域的特殊性に起因して「独特・混合的」な要素が土台になっていた。在日朝鮮人の生活と文化は植民地文化の普遍性と共に移住民の文化的特殊性を同時に胚胎していたのである。

注

(1) 一九五二年四月二八日、民事局長の通達により、在日朝鮮人は日本国籍を離脱して外国人となり、「帰化」または「朝鮮」、「韓国」国籍のいずれかを選択しなければならなかった。在日コリアンの中の「朝鮮」国籍と「韓国」国籍の比率は一九六五年以前は「朝鮮」国籍が圧倒的だったが、その後は「韓国」が圧倒的である。現在、日本の言論界では外国人として「韓国人」と「朝鮮人」を通称する

時、「韓国・朝鮮人」とするが、『在日コリアン』ともいう。(姜在彦、「在日」百年の歴史「環」(一一)、二〇〇二年秋、一五九頁) 本稿では歴史主義的観点から、『在日朝鮮人』と表現する。

(2) 『新編 新しい社会 歴史』、東京書籍、一九九九年、参照。

(3) 山中速人、「在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティ形成と複合文化状況」、『在日朝鮮人史研究』(二六)、一九八六年十月、九八頁。

(4) 本稿は一九三七年を終点に協和会事業実施以前の文化的現状に注目し、日本当局の政策の変化と関連した時期別の在日朝鮮人文化の変化については次の機会に考察する。

(5) 各種資料と先行研究については外村大、金仁徳の研究史整理の文章を参照(外村大、「在日朝鮮人史研究の現状と課題についての一考察―戦前期を対象とする研究を中心に―」、『在日朝鮮人史研究』(二五)、一九九五年九月、金仁徳、「日本地域の独立運動に関する研究の回顧と展望」、『韓国史論』(二六)、一九九六年)。

(6) 鄭惠瓊、「日帝下在日朝鮮人民族運動の研究―大阪地方を中心に―」、韓国精神文化研究院韓国学大学院博士論文、一九九九年、二二頁。

(7) 前掲論文、三五頁。

(8) 金仁徳、『強制連行史研究』、京仁文化社、二〇〇三年、二八〇頁。

(9) 朝鮮総督府、「阪神・京浜地方の朝鮮人労働者」(大正一三年七月)、朴慶植編、『在日朝鮮人関係資料集成』(二)、三一書房、一九七五年、四二頁。

(10) 金広烈、「在日朝鮮人はどのように形成されたか」、『在日朝鮮人彼らは誰なのか』、サムイン、二〇〇三年、七八頁。

(11) 外村大、『在日朝鮮人社会の歴史学的研究』、早稲田大学博士論文、二〇〇一年九月、八四頁、この中で筆者は朝鮮・朝鮮人の村という意味で『朝鮮村』という用語を用いている。

(12) 西成田豊、『在日朝鮮人の「世界」と「帝国」国家』、東京大学出版会、一九九七年、六九頁。

(13) 金広烈 前掲論文、参照。

(14) 樋口雄一、「在日朝鮮人部落の積極的役割について」、『在日朝鮮人史研究』一、一九七七年、二八〇二九頁。

(15) 兵庫県社会課の『朝鮮人の生活状態』(昭和一二年四月)を見ると、日本の服を着る場合が七五・七%、朝鮮の服を着る場合が二四・三%であった。これはどこまでも数字上の問題で、地域や時期によってその内容は異なると考えられる。日本服(和服)と洋服を着ることを成功の象徴と考える場合もあった。(名古屋地方職業紹介事務局、「朝鮮人労働者に関する調査」(昭和三年)、朴慶植編、『在日朝鮮人関係資料集成』(二)、三一書房、一九七五年、六八九頁) 女性の衣装は主に韓服が主だったが、冬には外にコートをはかいて中に韓服を着たりもした。

(16) 司法省、「内地に於ける朝鮮人と其犯罪に就て」、朴慶植編、『在日朝鮮人関係資料集成』(二)、三一書房、一九七五年、二八一〇頁。

(17) 崔碩義、「大阪、小林町朝鮮部落の思い出」、『在日朝鮮人史研究』(二〇)、一九九〇年一〇月、五一頁、五三頁。

- (18) 金鍾在述、王城素編、『在日朝鮮人一代』、圖書出版社、一九七八年、一〇四頁。
- (19) 外村大、『在日朝鮮人社会の歴史学的研究』、早稲田大学博士論文、二〇〇一年九月『在日朝鮮人社会の歴史学的研究』、緑蔭書房、二〇〇四年刊行、八九頁。
- (20) 高権三、『大阪と半島人』、東光商会書籍部、一九三八年、参照。
- (21) 朝鮮村を中心に朝鮮人の夜学や塾が立てられた。労働夜学の形態は在日本朝鮮労働総同盟と地域の労働組合が主導的に設立した。『朝鮮日報』、『朝鮮中央日報』、『民衆時報』等の言論記事を見ると、大阪地域の代表的な民族教育機関は一九二八年に浪速区浪華夜学、一九三二年に東成区中本町関西共鳴学院、一九三〇年に共済学院、一九三四年に夜間簡易学校、東暎夜学（東成区中浜町所在）等が設立された。これと共に、相愛会系の夜学も多数存在した。これに関する詳しい内容は次の論文参照。伊藤悦子、「一九三〇年代を中心とした在日朝鮮人教育運動の展開」、『在日朝鮮人史研究』（一五）、一九八五年。
- (22) 外村大 前掲論文、一九二頁。
- (23) そしてこのような問題の解決策として夜学を語ったが、当時までは微々たる存在だった（『民衆時報』昭和十一年一月二日）。
- (24) 「京阪神朝鮮人問題座談会」、『朝鮮日報』、一九三六年五月五日。
- (25) 「京阪神朝鮮人問題座談会」、『朝鮮日報』、一九三六年五月八日。
- (26) 外村大 前掲論文、二二八頁。
- (27) 片山潜、「日本における朝鮮人労働者」、『片山潜著作集』（三）、一九六〇年、七七頁。
- (28) 鄭雅英、「路地裏から発信する文化」、『環』（一一）、二〇〇二年秋、二六七頁。
- (29) 本整理は次の論文を参照。樋口雄一、「在日朝鮮人論考 一」、『近代民衆の記録—在日朝鮮人』（二〇）、新人物往来社、一九七八年、五五—一五五二頁、崔碩義 前掲論文、四九頁。
- (30) 大阪市社会部調査課、「本市における朝鮮人の生活概況」（一九二九年）、朴慶植編、『在日朝鮮人関係資料集成』（二）、三一書房、一九七五年、一〇三六一—一〇四三頁。
- (31) 佐々木信彰、「一九二〇年代における在阪朝鮮人の労働生活過程」、杉原薫・玉井金五編、『大正／大阪／スラム』、新評論、一九八七年、一六五頁。
- (32) 前掲論文、一六七頁。
- (33) 大阪市社会部、『鶴橋中本方面における居住者の生活状況』、一九二八年—二月、六頁、一九〇七年に朝鮮村が形成された原因は知ることができない。
- (34) 佐々木信彰 前掲論文、一八九頁。
- (35) 原尻英樹、「つくりかえられ生産されるドラマ—生野に住む「日本人」と「朝鮮人」—」、『ぼるもん文化』（五）、新幹社、一九九五、一〇九頁。
- (36) 杉原達、『越境する民 近代大阪の朝鮮人史研究』、新幹社、一九九八年、一六二頁。
- (37) 鄭雅英 前掲論文、二六八頁。
- (38) 佐々木信彰 前掲論文、一九六頁。
- (39) 大阪市社会部調査課、「本市における朝鮮人の生活概況」（一九

二九年)、朴慶植編、『在日朝鮮人関係資料集成』(二)、三一書房、一九七五年、一〇三二頁。

(40) 金正明編、『朝鮮独立運動』(三)、原書房、一九六七年、八四八〜八五五頁。

(41) 『東亜日報』一九二九年八月二二日。

(42) 高権三 前掲単行本、二六頁。

(43) 高権三 前掲単行本、二七頁。

(44) 崔碩義 前掲論文、五一頁。

(45) 杉原達 前掲単行本、一六七頁。

(46) 高権三 前掲単行本、三五頁。

(47) 高権三 前掲単行本、三六頁。

(48) 崔碩義 前掲論文、四九〜五〇頁。

(49) 崔碩義 前掲論文、五三頁。

(50) 崔碩義 前掲論文、五六頁。

(51) 崔碩義 前掲論文、五一〜五二頁。

(52) 平林久枝、「ある在日一世の半生」、『季刊三千里』(二八)、一九七九年夏、一〇六頁。

(53) 兵庫県社会課、『朝鮮人の生活状態』、昭和二二年四月、一三四頁。

(54) 崔碩義 前掲論文、五九頁。

(55) 『民衆時報』昭和一〇年一月二五日、キムチではなく、日本で広く知られている朝鮮の食べ物が、辛子明太子、すなわちミョンドンジョツである。辛子明太子は原料が釜山で、明太で作った食べ物であるが、一八世紀から有名になった。これを釜山の日本人が日

本に紹介し、戦後に博多で作られた。(鄭大声、「日本の食文化と『在日』」、『環』(二一)、二〇〇二年秋、二八二頁) 勿論、在日朝鮮人は移住と共にこれを日本内に持ち込み食べ始めた。

(56) 『民衆時報』昭和一〇年二月二五日、この他にも朝鮮料理屋は東萊亭、慶花館、玄風館、達城館等の名前が見られる。(『民衆時報』昭和一一年一月一日) このうち、達城館の主人の金文圭は土木請負業も行っていた。

(57) 『民衆時報』昭和一一年一月一日。

(58) 『民衆時報』昭和一一年一月二日。

(59) 『民衆時報』昭和一〇年六月二五日、昭和一二年九月二一日。

(60) 『京阪神朝鮮人問題座談会』、『朝鮮日報』、一九三六年五月一日。

(61) 『民衆時報』昭和一一年七月二五日。

(62) 『民衆時報』昭和一一年二月二日。

(63) 詳しい内容は次の論文を参照。外村大、「大阪朝鮮無産者診療所の闘い」、『在日朝鮮人史研究』(二〇)、一九九〇年。

(64) 木村健二、「戦前期在日朝鮮人の定住過程―東京市の事例―」、『在日朝鮮人史研究』(二七)、一九九七年、一一八頁。

(65) 金浩永、「在東京朝鮮人の現状」、『朝光』、一九三九年二月、金史良は一九四一年『三千里』に「チギミ」という小説を書いた。

(66) 東京府社会課、「在京朝鮮人労働者の現状」、朴慶植編、『在日朝鮮人関係資料集成』(二)、三一書房、一九七五年、九八三頁、金晶東、「日本を歩く」、漢陽出版、一九九七年、三一六頁。

(67) 『東京における朝鮮人労働者の現状』、『共栄』(二〜四)、昭和四年四月、一七頁。

- (68) 木村健二前掲論文、一一九頁。
- (69) 内務省警保局、「在京朝鮮留学生概況」(大正一四年一二月)、朴慶植編、『在日朝鮮人関係資料集成』(二)、三二書房、一九七五年、三二〇頁。
- (70) 張赫宙、「朝鮮人村落を行く」、「改造」、昭和二年六月、参照。
- (71) 樋口雄一前掲論文、参照。
- (72) 張赫宙前掲資料、参照。
- (73) 三田登美子、「ハルメのうちー在日一世女性の聞き書き」、『在日朝鮮人史研究』(二六)、一九九六年、六四〜六六頁。
- (74) 金晶東前掲単行本、三〇一〜三〇二頁。
- (75) 金來成、「浅草劇場街」、「朝光」、一九三八年六月号。
- (76) 「京阪神朝鮮人問題座談会」、「朝鮮日報」、一九三六年四月二九日。
- (77) 『在東京朝鮮人協和会会報』(第三号)(昭和一〇年一月一日)(早稲田大学所蔵)。
- (78) 同上。
- (79) 高義東をはじめとした韓国近代美術の初期の作家たちの日本留学については次の文章を参照。キム・ヨンナ、『二〇世紀の韓国美術』、イエギョン、二〇〇一年、七〇頁。
- (80) 喜多恵美子、「韓・日プロレタリア美術運動の交流に関して」、「美術史論壇』(一一)、二〇〇一年上半期、六六頁。勿論、一九三〇年は具本雄が二科会美術展覧会で入選した年でもある(『朝鮮日報』一九三〇年九月五日)。
- (81) 崔烈、『韓国近代美術の歴史』、悦話堂、一九九八年、二六四頁。
- (82) 喜多恵美子前掲論文、七二頁。
- (83) 内務省警保局、『社会運動の状況』(一九三三年)、一四八七頁。
- (84) 彼らは各種のグループに参加して、美術的力量を蓄積した。詳しい内容は次の本を参照。キン・ヨンナ、『二〇世紀の韓国美術』、イエギョン、二〇〇一年。
- (85) 金晶東前掲単行本、二八八頁。彼は典型的な芸術家の姿を見せ、銀座の居酒屋と吉原の遊郭にも出入りした。配給ガスが入って来る一人暮らしの部屋兼アトリエが彼が住んでいた吉祥寺にあった。
- (86) 崔烈前掲単行本、四五四頁。
- (87) 朴容九、「垣根の下に立っている鳳仙花」、「音楽・演芸の名人八人」、新舊文庫、一九七五年、参照。以後、洪は一九二六年再度渡日して東京国立高等学院で勉強もした。
- (88) 金仁徳、「学友会の組織と活動」、「國史館論叢』(六六)、一九九五年、参照。
- (89) 姜徹編、『在日朝鮮人史年表』、雄山閣、一九八三年、二〇頁。
- (90) 「春季陸上大運動会スケッチ」、「学之光』(二二)、一九二一年六月、参照。
- (91) 姜徹前掲単行本、四〇頁。
- (92) 孫煥、「戦前の在日朝鮮人留学生のスポーツ活動に関する歴史的研究」、平成一〇年、筑波大学博士論文、二二七頁。
- (93) 『民衆時報』昭和一〇年七月一五日。
- (94) 『民衆時報』昭和一〇年十一月一五日。
- (95) 同上。
- (96) 『民衆時報』昭和二年一月一日。

- (97) 『民衆時報』昭和十一年一月一日。
- (98) 『民衆時報』昭和十一年六月二一日。
- (99) 孫煥 前掲論文、二一八―二三六頁。
- (100) 『民衆時報』昭和十一年七月一五日。
- (101) 『民衆時報』昭和十一年一月一日。
- (102) 『荒川親睦会ニュース』(第一号) (早稲田大学所蔵)。
- (103) 斐昭、「プロレスラー力道山伝説」、「ほるもん文化」(六)、一九九六年、三頁。
- (104) 梁泰昊、「在日」プロ野球列伝、「ほるもん文化」(六)、一九九六年、二八頁。
- (105) 兵庫朝鮮関係研究会編『在日朝鮮人九〇年の軌跡―続・兵庫と朝鮮人―』、神戸学生青年センター出版部、一九九三年、九〇頁。
- (106) 『神戸新聞』一九四一年七月一〇日、一三日。